機動戦士ガンダムいっちゃん

尾時山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダムいっちゃん

【Ｎコード】
Ｎ１１５８Ｚ

【作者名】
尾時山

【あらすじ】
一夏がＩＳじゃなく、ガンダムに乗ることになりました。彼は一体、どうなるのでしょうか？

第一話　出会いは試験会場

◆◇◆◇◆◇

「いけね、迷っちまった……」

学ラン姿の少年が、施設の廊下で言う。彼の名前は織斑一夏。女性しか扱えない兵器・ＩＳを使った、国際闘技大会モンドクロッソの、第一回優勝者、織斑千冬を姉に持つ少年だ。

「この辺りだったはずなんだが……」

高校受験の会場に来たは良いものの、迷ってしまって、現状に至るというわけだ。

彼は当初、就職するつもりでいた。しかし、千冬の薦めにより、高校進学へと進路を変えた。

「ここかな？」

がちゃりとドアを開ける音。そこには、得体のしれない機械が二台ほどあり、そして、教師と思われる人間が３人ほどいた。

「ああ、君。受験者だね？そこのヘルメット付けて、コクピット入って」

「あ、はぁ……」

藍越学園とは、随分変わった試験をする学園だな。一夏はそう思った。

言われたままにし、機械の中に入る。ハッチが閉じ、完全な密室となる。スイッチ、ペダル、レバーが所狭しと並んでいた。

「これから実技試験を行います。これは、貴方の能力を測るための物です。相手は私、浜松圭。よろしくお願いします」

「織斑一夏、です」

「織斑くん、今からオーバービューに切り替わります。シグナルが出ますので、青から赤になったら、戦闘開始です。１対１ですので、全力でおいでください。なお、機体は私と貴方、ＭＳ－０６Ｆ、ザク？です」

言った途端、密室内が明るくなった。黒色の世界に、無数の光源がそれを照らす。

画面には色々な情報が出ていた。残弾数、ジェネレータ出力、ブースト量、エンジン、ＣＰＵ稼働率。しかし、一夏は何一つわからなかった。

シグナルが青から赤に変わる。同時に、右から強い衝撃が来た。

「うぉっ！！なんだありゃあ！！」

緑色の、単眼の巨人。これがザク？か。

「ばかやろぉっ、こんなんどうやって動かせ……。これか？」

右手のレバーを前に倒す。右腕が前に振られた。

続いて、左足のペダルを踏み込み、右手の、小さなスライドレバーを前に倒した。すると、いきなり飛び上がった。

「あれを倒せばいいのか？えーっと……Ｗｅａｐｏｎ？これを開い

て？ヒートホークと、ザクマシンガン、クラッカー？」

クラッカーがわからない。取り敢えず、それを手元のタッチパネルでタッチしてみると、投擲武器だということが判った。

「武器変えは？このボタンか？」

かちゃかちゃと弄ってみる。クラッカーが装備され、手に持たれる。

そうこうしている内に、また銃撃が一夏を襲う。二度同じ手は喰らわない。一夏はペダルを踏み、ブーストを使って避けた。

中心のレバーを組み合わせれば、サイドに素早く移動が出来るようだ。前に倒せばゆっくり進むし、ぐるりと回転出来て、受け流すのにも使える。

「大体判ったぞ」

一夏はクラッカーを投げ付ける。敵がマシンガンでそれを撃ち落とすが、それが狙い目だったのだ。

狙った隙に、マシンガンで腹部を連射する。綺麗に装甲に吸い込まれた。一旦怯んだのを見た一夏は、ブーストを吹かしながら、ヒートホークに持ち替え、腹部を両断した。

同時になる爆発音。相手ザクが爆発したのだ。3秒程するとモニターが暗くなり、ぱしゅっとハッチが開いた。

コクピットから出て、試験官の方に向かうと、あちら側の機械から、先程対戦した教師が出て、一夏にダッシュして近付いた。

「素晴らしい……。織斑くん、君は天才だ！！」

「へっ？」

一夏が間抜けた声を出した。教師は続ける。

「冷静な判断、見事なデコイ……。どこかで教わりましたか！？」

「え、いや……。俺は、あの攻撃が精一杯でした」

それまでとは、と教師が関心した。そして、一夏にこういった。

「この試験で私を倒したのは君が初めてです。素晴らしい！！君は特待合格です！！ようこそ、ＭＳ学園へ！！」

「えっ？ありがとうござい……はぁっ？」

藍越学園ではなかった。いきなり馬鹿をしてしまった。

千冬になんと言えば良いだろう。間違えたなんて言ったら、大目玉だ。

取り敢えず、正直に千冬に言おう。と、一夏は大人しく家に帰った。

第二話　分かってくれたよお姉様

◆◇◆◇◆◇

家に着くと、鍵が既に開いていた。先に千冬が帰っているのだろう。玄関のドアを開け、ただいまを言った。

居間まで行くと、千冬が煎茶を飲みながら寛いでいた。

「ああ、おかえり一夏。どうだった？」

「それが……」

何だか様子がおかしい。千冬が気にかかった。

「どうした？」

「藍越じゃなく、ＭＳ学園を間違えて受けちゃって……」

千冬の持っていた湯呑みが割れた。真顔になり、一夏を見た。

「そこは、超エリート高校だぞ……」

「え、ええっ！？千冬姉、マジで！？」

「ああ……。ＩＳ学園よりもな……」

千冬が教鞭を執っているＩＳ学園。そこも相当頭がいい。

ＩＳとは、一夏や千冬の幼なじみ、篠ノ之束が創った物だ。コアを必要とし、それは女性にしか反応しない代物。つまり、女性にしか動かせない。

「俺、そんなとこに、特待生として合格しちゃった……」

湯呑みが粉々になった。千冬は一夏の肩を叩く。
「お前、いつからモビルスーツ乗りに目覚めたんだ？」
「えっ！？モビルスーツってなにさ！？」
「モビルスーツは巨大兵器だ。ＩＳなんぞ目じゃない」

ビームを使い、銃や剣にしたり、バリアにしたりと、色々な武器が使われている。

その話をしている時、ちょうど電話がかかってきた。千冬が子機を取り応対する。

「はい、織斑です。
――ワンオフ機！？一夏専用の！？」

珍しく千冬が狼狽している。一夏がその光景を目の当たりにし、何か悪い予感しかしなかった。

「はあ……。アナハイムの方が日本に……」

アナハイム・エレクトロニクス。ＭＳシェアＮｏ．１の会社だ。核融合エンジン、核分裂エンジン、ムーバブルフレーム、ビーム兵器など、様々な開発をしている。そんな会社が、一夏専用機を作りたいと言ったのだ。

「ええ……。明日、八王子の方へ。はい。私も保護者として参ります。はい、よろしくお願いします。失礼します」

電話を切り、一夏を満面の笑みで見た。

「凄いぞ一夏。お前のワンオフ機を作ってもらえるそうだ」
「は、はあ？いきなりぶっ飛びすぎじゃないか！？」
「結果を出した物には褒美が与えられるものだろ？いいじゃないか。またとないチャンスであるんだし」
「そうだけどさ」

ＭＳ操縦は初心者な為、そんなハイスペックな機体を作ってもらうのは気が引ける。それに、同じ理由で、情けないところを見せてしまったら、作ってくれたアナハイム社に申し訳ない。

「因みに一夏。試験内容はどんなものだったんだ？」
「シミュレータを使って、宇宙空間で試験官と対戦。なぜか勝てた」

――――こいつは、可能性の獣か？
ＭＳを扱うのも初めてのはずだ。それを、何倍もの経験がある教師に勝ってしまうなんて。天才かなにかとしか思えない。

この才能を見つけた間違いに感謝しなければ、千冬はそう思った。この才能を伸ばすには、ＭＳ学園は打って付けのはずである。

「ま、ＭＳ学園はＩＳ学園と提携していることもあるしな、なにかの縁があったと思えるな」
「そうなの？」
「ＩＳとＭＳを使った実践練習とかあるぞ」

何か楽しそうな匂いがしてきた。一夏は拳を握り、この運命に感謝と期待を告げた。

「明日は7時ごろに家を出るぞ。八王子だ」

「わかった」

夕飯を作るのも、朝食を作るのも、一夏の担当だ。早起きも慣れっこである。

それから、今日の残りの時間をゆっくりと過ごし、胸に宿る希望と不安を落ち着かせ、眠りに着いた。

第三話　ホワイト・ユニコーン

◆◇◆◇◆◇

朝８：３０。八王子で電車を降りると、駅のロータリーに、高級車、いわゆるリムジンが止まっていた。黒スーツの男が一夏達を見つけると、車まで案内した。

乗り込むと、既に昨日の試験官、浜松が、着慣れてなさそうなスーツを着た男と話していた。

「こんにちは織斑くん。そちらは、織斑先生ですよね？浜松圭です、よろしく」

「どうも。織斑千冬です。よろしくお願いします」

「こちらが、アナハイム社随一の――」

「アストナージ・メドッソだ。お前がイチカだろ？」

「は、はい。織斑一夏です。よろしくお願いします、メドッソさん」

アストナージにお辞儀する。しかし彼は顔を上げろと言った。

「中々いいツラしてるな。気に入ったぜ」

「はあ、ありがとうございます」

「アストナージさんは元・地球連邦軍の曹長なんですが、アナハイム社に引き抜かれ、今では開発部トップの能力を持っています」

「これはまた、凄い人が……」

この人にＭＳを作ってもらえるとなると、尚更期待に応えなくて

はならなくなる。

「お前の実力を、この先生から、ディスクで見たぜ。あれは凄いな。先生の速度も中々だが、まず何より、お前の反応だ」

「え？」

一夏が首を傾げる。千冬もその言葉に興味を持った。

「先生が銃を撃つ少し前に、もう動き出してんだよ。しかも、なるべく少ない動きでな。その後、クラッカーをデコイにしただろ？」

「はあ……」

「銃口に引き付けられるように投げてんだ。これはすげえ。そこのブリュンヒルデさんに教わったとも言えん。アンタは剣で勝ち抜いていたしな。見るか？昨日の一部始終」

アストナージがポータブルのメディアプレイヤーを千冬に渡す。再生すると、確かにアストナージの言っていた通り、先読みとまでは行かないが、早く反応して避けている。

姉ながら思う。私の弟は化け物だ、と。

「お前さんと似たような戦い方、見たことあるんだ。そいつらもこういう動きをしていた」

「え？俺の他にも？」

「どいつもエースパイロットだよ」

流石に、エースパイロットまでとは行かないだろう。しかし、その領域に辿り着ける能力は持っている。

一夏本人は気付いていないが、アストナージは確実にそれを見抜いていた。

◆◇◆◇◆◇

「さ、そろそろ着くぞ。アナハイム日本支部」

支部といえども、相当大きな建物だ。リムジンがこれまた大きなゲートで止まる。接客担当の社員がドアを開け、建物の中を案内した。

「ようこそ、織斑一夏様。ここはアナハイム日本支部、ＭＳ開発ファクトリーでございます」

「は、はあ……。どうも」

少し痩せた男が一夏に挨拶する。名刺を渡され、それを確認すると、「マ・クベ管理長」と書いてあった。

「マ・クベ、と呼んでください。私、名前が極端に短いものですから」

「わかりました」

「では、そちらの者が貴方のＭＳの所まで案内いたします」

黒いスーツの男が、どうぞこちらへ、と案内した。

エレベーターを使って、地下３０ｍまで潜った。多数の道があり、どれも格納庫のようである。先導の男に着いていくと、大きなドアに突き当たった。

男がカードキーをドアのリーダーに読ませると、ドアが開き、大きなブリッジが伸びていた。

ブリッジを少し歩き右手側を見た。ザクとは違う、白色の巨人。スリム且つシャープで、四本のアンテナと、ツインアイが頭部に見えた。顎の様な所は凛々しく尖っている。

一夏は、そのＭＳに見とれた。千冬も、同じ物を見て絶句した。

「ＭＳＺ－００６、Ｚガンダムだ」

「アストナージさん！その格好は？」

「メカニックってのは、ツナギが正装なんだよ」

クリーム色のツナギを着たアストナージが、Ｚガンダムと呼んだＭＳの頭部から、リフトで降りてきた。

「俺は昨日、データをここに送って、今日は俺自ら最終調整って訳だ」

「なるほど」

リフトがブリッジと同じ高さまでくると、それを結ぶ小さな通路がブリッジから伸びてきた。アストナージが一夏に近付き、小さなディスクと、ヘルメットを渡す。

「これは？」

「コイツのＯＳと、後は俺からの入学祝いだ」

白をベースに、赤のラインが駆け巡るデザインのヘルメットだ。顔の部分がパカリと開く。そこに顔を入れ、キッチリ締めると、ハッチが開いているコクピットに入った。

アストナージと千冬が着いていく。一夏は、新品のシートに背中を預けた感触に少し興奮していた。

「起動方法はわかるか？上にある赤いスイッチを押すと、ＢＩＯＳが立ち上がる。ディスクスロットはデータモニターの横にある」

ディスクを入れ、言われたことをした。ＭＳがＯＳを読み込み、３０秒もかからず設定画面になった。

「パーソナルデータは名前だけ打ち込みゃいい。他は全部こいつがやってくれる」

言語選択を日本語にし、名前を打ち込む。すると、「生体データを取得しています」というメッセージが出た。

「バイオセンサーが働いているんだ。シートの人間を認識すると同時に、今回は動作テストも兼ねている」

《生体データが計測されました》

またもやメッセージ。すると、シートの周りが全周囲モニターになり、データモニターに「スペック一覧」と、丁寧に出ていた。

「ああ、バイオセンサーってのは、搭乗者の思念を力に変えるシステムな。少し違うけどな」

取り敢えず、凄いシステムなのは分かった。そして、スペックを見る限り、凄いモビルスーツなのも解った。

この機体は可変機だ。スムーズな可変をするため、足元にスラスターが何基もある。その為、速度やスラスター出力の値がとてつもなく高い。

――――俺は、この機体を扱えるのか？

シートに座って、恐れた。しかし、この機体を振り回すぐらいになってやりたい。

努力すれば、人は何でも出来る。一夏はそう信じた。

「アストナージさん、千冬姉。動かしたいから、どいてください」

「最初からそのつもりだ。最終チェックは、ユーザーのお前の仕事だからな」

ブーストはザクと同じ様な筈だ。ハッチを閉めると、一夏はペダルを踏み込み、スライドを前に勢いよく押した。

第四話　ロールアウト

◇◆◇◆◇◆

天井の隔壁が開くと、Ｚは勢いよく飛び上がった。アストナージと千冬がそれを見届け、歓心する。

「いやぁ、作ったモンを、ここまで勢いよく使ってもらえるなんてな」

「アストナージさん、浜松先生。あいつは昨日、初めて、ＭＳの操縦に触れたんです」

「は？嘘だろ？」

「事実です。なのに、一夏が、あそこまで容易くＭＳを動かすとは思っていませんでした」

――私の知らない空を見れるようになったんだな。

嬉しくもあり、悔しくもある千冬の心情。アストナージはそれを汲み取り、千冬に言った。

「成長を見守るのも、家族の仕事だぜ」

「……そうですね」

大きく開かれた隔壁が閉じ始めた。一番近くが閉じると、アストナージ達はその部屋を出て、データ室へと向かった。

◆◇◆◇◆◇

「すげえ速さだ、こいつ……」

上昇している速度が、周りの景色だけで解る。目移りする間もな

く変わっていくのだ。それに少しだけ怖がりながらも、一夏はＺにワクワクしていた。
こいつはどんな動きが出来るんだろう。俺はこいつをどうやって扱おうか。しゃぶりつくすにはどれほどの時間が掛かるだろう。
とにかく、期待が絶えない。

データモニターに［ＣＡＬＬ］の表示が出る。手元に光ったスイッチがあったのでそれを押すと、アストナージの声が、ヘルメットの内部スピーカーと、コクピット内のスピーカーから聞こえる。

《センサーの感度はどうだ？》
「センサー？」
《モニターの解像度とか、何かを感知したりとかがあれば、センサーが働いている》

ヘルメットの内部マイクで声を出した。周りを見ると、ビルや、地面にいる人などが認識できた。小さなマーカーが出て、詳細も現れる。

モニターのダイヤルスイッチを回してみる。データモニターの上のマルチディスプレイが、マーカーが挿した人に対してズームしたり、離れたりと様々な反応をした。

「大丈夫です、問題ありません」
《そうか。サーモス表示はどうだ？データモニターの右にある、上から二個目のボタンだ》

言われた通りに押した。サーモグラフィーに変わり、熱源が解る。

「正常です」

《よし。次はビームライフルの調整をしよう》

既に装備しているライフルを構える。自然と弾道予測やサーチマーカー、サイト等が立ち上がった。ライフルをある程度動かし、全てが速度に着いてこれているのを確認した。

「大丈夫です」

《じゃ、最後だ。変形してみろ。モニター左脇のデカいスイッチを押して、フットペダルを踏め》

順序よくその動作を行う。下半身が回転し、背中のフライングアーマーからウイングが出て、シールドが機首になった。同時にコクピットも機首を前にするように回転した。

《WR（ウェイブライダー）形態は大丈夫だな》

「この状態は、ウェイブライダーと言うんですね。わかりました」

左足のフットペダルを踏み込む。高速で前進し始めた。右足のフットペダルを踏むと、ブレーキとなり、少しの制動距離で止まった。

浅くペダルを踏むとゆっくり進む。センターレバーの操作で旋回が出来る。

「なるほど……」

段々分かってきた。感触も馴れてきた。一夏はスライドレバーを思い切り前に出す。同時にペダルも踏み込み、全速力で前に動き出した。

「かぁっ！！はっええっ！！」
《いいぞ一夏、そのまま旋回してみろ》
センターレバーを手前に引き、宙返りをする。そして、大きく、そして素早く右回転させた。
《バレルロール！？》
かなり高度な技術だ。それを、全速力でやるとは、やはり、この男、ただ者ではない。
「もしかしたら、これは？」
センターレバーは、一本自身で回転も出来る仕組みにもなっている。それを使い、おもむろに回転させると、狙い通りZもドリルのようにスピンし始めた。
《あんなもん、ルーキーが出来るようなもんじゃねぇぞ！？》
アストナージら三人の驚きは絶えない。そのまま減速せずに、MS形態に戻り、ファクトリーの真上に戻った。
《こいつは、天才だ……》
「アストナージさん、どうすればいいですか？」
《あ、ああ。近くに、ハンガーがあるだろう。そこに停めてくれ》
「わかりました。」
スラスターを軽く吹かし、ハンガーへと移動する。アストナージ達も、ハンガーへと向かった。

コクピットハッチを開け、ラダーに捕まって降りる。一番最初に出迎えてくれたのは、満面の笑みをしたマ・クベだった。

「どうですか？感触は」

「凄い速いです。スタイルもかっこいいし。でも、俺が扱えるかどうか……」

マ・クベは一夏に好感を持った。謙虚な男だ。あれほどの腕を持ちながら。

「これは、いいものだ。そして、あなたの腕もです」

「はあ、ありがとうございます」

「もっとご自身に、自信を持ちなさい。あなたはそれでいいのです」

そうだ。俺はＭＳ乗りなんだ。ＭＳ学園にも通う、パイロットなんだ。コイツを扱うための技術なら、そこでいくらでも学べる。この機体を使うためにも、自信を持って、恥ずかしくないようにしなければ。

「はい。ありがとうございます」

マ・クベのアドバイスに、一夏は少し間を開けて答えた。

第四話　ロールアウト（後書き）

ＭＳ学園の、一夏の担任教師はどうしましょうか……。

今のところ、ハマーン様、ヤザン、ランバ・ラル、アムロ・レイ、ブライトさんを考えています。
クラスメイトも考えなきゃ。

これらに着いて、何かご意見やアイディアなどありました、よろしくお願いします。

第五話　ＭＳ学園入学（前書き）

テスト最終日なので投稿しやすぜ旦那様、奥様！！

実はこの話の執筆開始日が１２／６……

１週間掛けました。

え？肝心のテストは良かったんだろって？

古典・家庭科・現文・数Ｂが死にゲーでしたが？

第五話　ＭＳ学園入学

◆◇◆◇◆◇

Ｚを受領して半月後。一夏は、アナハイム社から借りた、近くの格納庫に向かった。アストナージから貰ったヘルメットを被り、ＭＳ学園の制服を着て。

一夏の制服は全体的に白く、首元や手首など、黒い部分があった。胸元に、特待生であることを示す羽根のブローチが着いていた。この白服も、特待の証らしい。しかし、増長はしない。足元を掬われてしまう。

ちょうど千冬を乗せ、ＩＳ学園へと飛び立とうとしている所だ。

「Ｚガンダム、行きますよ」

軽くスラスターを吹かし、地面から離れた。そして、ＷＲ形態へ変形し、ＩＳ学園へと向かう。

「千冬姉、この速度だと7分で着くよ」

「速いな」

シートの後ろで、簡易ヘルメットを付けた千冬と離す。この時、千冬も初めてＭＳに乗った。

「あれでしょ？」

「ああ。そろそろ、この飛行機形態を解除してくれ」

「飛行機じゃないよ、ウェイブライダー」

３日で既に愛着が湧いてしまった。と、いうのは、アナハイムのテスト施設で、基本操作や攻撃法などを練習したからだ。そこそこ、この機体を扱えるようになった。
愛着が湧きすぎたためか、左のショルダーアーマーに、ユニコーンのマークが描いてある。

「ホワイトユニコーンが泣くぜ」
「ははは、すまなかった」

苦笑いする千冬。ここまで、この機体が気に入ったのだ。新しいおもちゃを与えられた子供の様に。「はい、到着」

校門前にゆっくりと着地する。下にいた生徒がいないところを狙った。

膝立ちになり、コクピットハッチを開け、そこにマニピュレーターを出す。千冬がそれに乗ると、ゆっくりと地に降ろした。

「ありがとう、一夏」
「……一夏？」

千冬の声と、一夏の単語に、ある一人の生徒が反応した。ポニーテール、緑色のリボンの少女。モニターで確認すると、幼なじみの篠ノ之　箒だということが解った。

「お、箒じゃん。久しぶり」

外部スピーカーで話す。箒はコクピット内を覗き込み、一夏を確認した。

一夏はラダーを伝って地面に降りた。それに箒が近付いて来る。ヘルメットを取り、脇に担ぐと、箒にまた挨拶した。

「よ、久しぶりだな、箒。元気してたか？」

「あ、ああ。お前も元気そうで何よりだ。それより、コイツは、お前のか？」

ゼータを指したのだろう。一夏はああと答えた。

「俺のモビルスーツだ。ゼータガンダム、ホワイトユニコーンって俺は呼んでる」

「ホワイトユニコーン……」

かっこいい名前だ、と箒は思った。一夏はZを見上げながら箒に言う。

「俺、MS学園の特待生なんだ」

「な、なんだって！？」

「といっても、モビルスーツに触れたのは半月前だし、ルーキーなんだけど。でも、コイツは、俺に応えてくれる。一番過敏に、そして迅速に」

発言が大人っぽくなった。一夏に対し、箒は更に興味が惹かれる。

「コイツは俺の相棒だ。いつかお前も、コイツに乗せてやるよ」

ニコッと笑いながら言う。箒の顔が赤くなった。彼女の胸で、何かがときめいた。

「お、そろそろ行かなきゃな。じゃあな、箒」

「あ、ああ。一夏、絶対乗せてくれよ！」

「ああ」

手を挙げながら、ラダーに捕まり、コクピットへと戻った。ゆっくりとZが空中に上がっていく。校舎が小さく見える高さまでになると、WRへ変形し、MS学園へとバーニアを吹かした。

箒が見送る姿を、モニターで確認する。一夏は懐かしい感覚に、シートで微笑んだ。

「あれは……」

箒や他の生徒がZに見とれる中に、一際目立つブロンドの少女がいた。Zに何か感じたらしい。

「美しい、モビルスーツ……」

純白の機体に心奪われたらしい。彼女は、Zをこう思った。

――大空の守護神。

肩の一角獣。そして、四本の逞しい角。

「お母様……。私(わたくし)は今、神を見ましたわ……」

白い尾が伸びていく。一角獣の軌跡。それを彼女は眼で追った。

「一角獣様、どうぞ私をお護り下さい……」

少女は願いを込めると、自然と笑顔になった。

◆◇◆◇◆◇

機体のナビ通りに進み、MS学園上空へと入った。間もなくして

通信が入る。

「はい、こちら織斑です」

モニターに、くせっ毛の男が表れた。青い軍服の様な服を着ている。

《君が織斑君か。僕はアムロ・レイ。この副学園長をしている。織斑君、その先少し行った所に、ハンガーがある。そこに君の機体を降ろしてくれ》

「わかりました」

彼の言葉通り、ハンガーと、整備工場の様な建物があった。下に2程、人が指示灯を降っている。

WR形態のまま、ゆっくりと着陸した。機体から降りると、先程のアムロと、白い肌に金髪の男、そして色黒の男がいた。

「ようこそ。学園長のシャア・アズナブルだ。そちらは、先程自己紹介していた通り、アムロ・レイ教諭。そして、こちらが……」

「ヤザン・ゲーブルだ！！お前の担任だ。一年間、可愛がってやるからな」

威勢の良い挨拶。一夏はヤザンに少し驚くも、きちんと自己紹介をした。

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

シャア達と握手を交わす。やはり、いい人達そうだ。

「早速で悪いのだが、君には、入学式での、新入生代表の答辞をしてもらう。何、原案はあるから、これを読むだけだ」

シャアが懐からそれを取り出し、一夏に渡した。

「僕がやるんですか？」

「ああ、なんせお前は入試トップの逸材。浜松を倒したんだろう？だから白服を着てるんじゃないか」

他の服とは違う重み。一夏はそれを改めて実感した。

「まあ、読むだけだからな。大丈夫、簡単な仕事だ」

「はい。わかりました。噛まないように頑張ります」

「フッ、おもしれぇ奴だな」

少し軽口を叩いてみた。少しだけ気が楽になった。

「では、式典ホールに行こうか。着いてきなさい」

シャアを先頭として、列に並び着いていく。また少し緊張し始めたが、ヤザンがそれに気付き、声をかけた。

「なぁに、ちょちょいとやっちまうだけさ。すぐ終わる」

「そういえば、ゲーブル先生。この学園長には、何人入学してくるんですか？」

一夏がヤザンに聞く。しかし、即座に答えたのはシャアだった。

「約４００名だ。その内の数名が赤服、つまり、エースの制服を着

ている。しかし、羽根持ちは一名のみ。一夏君、君だ」

人数の規模にも驚いたが、１／４００の中から選ばれたのも驚きだ。一夏は、４００人の「羽根持ちになる」夢を壊したことになる。それは彼にとって、重荷ではあるが、その分、４００の働きを出来るという証明にもなるのだ。

「その中の羽根持ちになれて、どうだ？」

「光栄に思います。しかし、４００人の夢を背負っているため、安易な事は出来ません。しっかりと励んでいきたいと思います」

「中々しっかりした奴じゃねェか。なあ、シャア？」

「うむ、むしろその自覚を持ってくれないと困る。さあ、そろそろ着くぞ。一夏君、君の出番が来るまで、緊張を解しておくと良い」

大分緊張は解れている。それを伝えた一夏に対し、シャアは優しく微笑んだ。

――今年の羽根付きは、今までの中で、一番の大物かもしれん。

シャアは一夏に、それ程興味と期待を持った。

◆◇◆◇◆◇

長いお話などが終わり、いよいよ一夏の出番。

「新入生代表、織斑一夏」

呼ばれると返事をし、ステージ脇から、マイクのある真ん中まで歩いていく。

「式辞。麗らかな青空が広がり、桜が舞い踊る春。我等４３７名は、ＭＳに惹かれ、ＭＳを動かすためのの努力をし、今日、この学園に入学することとなりました」

はっきりとした声。とても聞こえやすく、クリアな声である。

「これから三年間、ＭＳに触れ続けて行くこととなります。その中で、教科書には書いていないＭＳの本質、ＭＳの可能性、ＭＳの未来などを学び、自分達の未来へと繋げていきたいと思います。以上を持ちまして、新入生の式辞とさせていただきます。代表、織斑一夏」

やりきった。顔がぱぁっと明るくなる。来席している人間達にお辞儀をし、またステージ脇に戻った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1158z/

機動戦士ガンダムいっちゃん

2011年12月13日08時47分発行